

阪神・淡路震災復興計画後期5か年推進プログラム
フォローアップ委員会（第3回） 議事概要

1. 日 時 平成14年1月31日（木） 14:00～16:00

2. 場 所 兵庫県民会館7階「鶴」の間

3. 議事内容

(1) 資料説明

- ・事務局が、生活復興調査結果、復興モニター調査結果、「復興フォーカス2002」、むすぶ・つなぐフォーラム、H14復興モニター調査について説明した。

(2) 意見交換

(中心市街地の活性化・まちのにぎわいづくりについて)

中心市街地活性化の問題は、全国的な課題であるが、とりわけ被災地では震災の影響もあり深刻な問題となっている。人口の流出や店舗の移動など、何が原因でにぎわいが失われているのかをしっかりと分析した上で、活性化策を論じる必要がある。

人々のまちの空間やにぎわいに対する考え方が変化している。生活エリアの中にゆとりやあそびのエリアがほしいと考える人が多い。例えば、復興住宅の1階に設けられた喫茶コーナーのようなスペースが必要である。

芦屋では、生活支援型グループハウス1階の交流スペースや自宅の一部を開放したコミュニティスペース、セシリアホールの3つの空間を活用して、地域の人がお茶を楽しんだり、音楽や芸術の催しを開催したりする仕掛けづくりを行っているグループがある。こういう小さなスペースがたくさんあるようなまちづくりをするべきである。

昔、東京で一番多かったのは駄菓子屋で、駄菓子屋にはいつも子どもが集まっていた。合理性を追求すればするほど大切なものが失われていっている。これからのコミュニティには、駄菓子屋的なゆとりのある空間が必要なのではないか。

震災後、地域の人々が集まるようなコミュニティスペースがたくさんできており、復興の一つの成果ともいえる。これらには、いろいろなタイプのものであるので、整理して調べてみる必要がある。

地域、商店街と大学を結びつけるようなしくみづくりを考えるべきである。学生が来るだけでまちがにぎやかになる。

外国では例があるが、学生のまちづくり活動に対して大学の単位を与えるような制度を考えるべきである。

観光が足踏み状態であり、地域の歴史や文化を再発掘して、生活のにおいのある観光メニューを増やしていく必要がある。例えば、神戸のインド人街（ボンベイタウン）を復活させるなどの取り組みをやれば面白いのではないか。

集客施設をつくってにぎわいをつくるというのは無理である。被災地には空き地が多くあり、これを暫定的に使ってにぎわいをつくるような工夫をすべきである。

(高齢者の見守りについて)

南芦屋浜の復興住宅では、高齢化率が63%と非常に高く、LSAによる一時的家事援助も350件/月に上っている。また、尼崎のけま喜楽苑は50名の定員に対して480名の申し込みという状況である。介護保険を受けられる人やLSAが訪問する人はまだよいが、その狭間にある生活支援が必要な人(介護保険を知らない人もいる)に対する福祉サービスのシステム(例えばLSAの24時間対応等)をきちんと整備することが必要である。

復興公営住宅の高層化や高齢者の集中、シルバーハウジングの各階への縦列配置のあり方などをめぐる問題は、復興住宅政策の副作用的な面があり、今後はそれらを調整していく視点が必要である。また、2006年から人口が減少傾向に入るといったことも、今後は視点に入れていくべきである。

(その他)

労働組合、経営者ともに「時代が変わっている」という視点で、「ひょうご経済・雇用再活性化プログラム」を活用して取り組んでいかなければならない。また、産官学が連携しながら、その能力を最大限に活用できるようにすることが重要である。

外資系企業を誘致する施策も大事であるが、誘致した企業が力をつけて軌道に乗っていけるような進出後のフォロー施策についても検討する必要がある。

(文責：兵庫県阪神・淡路大震災復興本部総括部復興企画課)